

Ⅲ 「古典入門」について

—— 中・高のつながりを視点にして ——

白 井 宏

はじめに

中学の時は古典が好きで、高校へ入ってから本格的に習うのを楽しみにしていたが、実際に高校に入って古典の授業を受け始めて、その無味乾燥、面白くなさがっかりして、古典がすっかり嫌いになってしまった。高校1年生に古典の感想を尋くと、よくこういうことばが返ってくる。同じ古典をやるにしても、中学と高校とでは、その内容・扱い方かなりの違いがある。それは事実であり、またそうであるべきだとも言える。しかしその差違が、生徒に興味や関心を失わせるようなものであってはなるまい。そういうものを継続し深化させて行くようなものでなければなるまい。そうなる原因はどのような点にあるのだろうか。筆者は大きく2つの原因があるというふうに考えている。

その1は、高校へ入った途端に古典文法をやみくもにつめ込むこと。文法が判らなければ今から高校生活3年間苦労し続ける、古典がさっぱり判らなくなり苦手になってしまう。それを脅し文句にして、教える方ですら面白くもなるともないお経の文句のようなことをひたすら暗記させる。これで古典というものに興味を持ってというほうが無理かもしれない。

その2は、扱い方、教え方の極端な違いからくるとまどいである。中学の時の古典の扱いは、何と云っても1学年に1単元しかないので教える方も教えられる方も物珍しく、新鮮である。それに本格的にやるというわけではないので、好い意味で気楽にのんびりとやれる。だから楽しいのである。それが高校になると古典という独立した科目になり、最初から気負ってしまって先に述べたようなものになって、気楽さといったものが出難くなってくる。古典の楽しさ、そういうことについてもっとよく考えてみなければなるまい。

高校入学時の、古文に関する知識程度の不揃いということも、古典入門期の指導について留意しなければならないことであろう。歴史的仮名づかいもよく知らず、五十音が正確に書けない生徒もいるし、古典文法のあらましについて大体マスターしている生徒までいてかなり多層である。大体、何も知らないという前提で、入門期の授業を始めるのではあるが、中によく知っている生徒がいたりすると、ついそれにひきずられ

て最初の基礎的な大切なことの扱いに丁寧さ、ち密さが無くなるということがあるかもしれない。小学校1年生に初めて文字を教える時の状況とやゝ似ているかもしれない。

さらに視野をもう少し拡げて考えてみると、高校教育というものが、今や半ば義務教育化してきているという現状も等閑視はできないことである。つまり、中学校段階における古典教育が、義務教育の最終段階として、一応完成したものを体系的に与える必要があると一方では考えねばならず、他方では、高校でやることへの内容的、方法的つながりを考慮しなければならないということである。

本稿においては、以上のような観点から「古典入門」について、特に中学・高校のつながりを視点にして考えて行きたい。

1. 中学校における現状

次に示すのは、中学校用国語教科書A社版、1年生から3年生までのそれぞれの古典単元の目次と内容の概略である。

1 年生

単元7 祖先の心 — 古典を読む

1. 生活の笑いと知恵 編修委員会の書きおろし
川柳、ことわざ、格言、故事成語
(参考) 漢文の読み方
2. 龍の首の玉 (竹取物語)
あらすじ → 本文の口語訳
3. 敦盛の最期 (平家物語)
あらすじ → 本文・口語訳の対訳
(参考) 古文のかなずかい

2 年生

単元8 昔の人々 — 古典を読む

1. 保昌と袴垂 (今昔物語)
本文 → あらすじ → 本文
2. 武 悪 (狂言)
あらすじ → 本文 (ト書きは現代語で補う)
3. 義を買う (戦国策)
(参考) 古典のことば
古語、係り結び

3 年生

単元8 伝統と現代 — 古典を読む

1. 伝統とは (箴言)
アインシュタイン, 谷川徹三, 島崎藤村
2. 国語と日本文化 加藤周一 (書きおろし)
3. 中国の心 編修委員会
 - (1) 唐の詩
黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る (李白)・山行 (杜牧)・江雪 (柳宗元)・無題 (杜甫)
 - (2) 孔子の教え
『論語』より6例文
以上を中心とする解説文。

漢文の分野はここでは問題にせず、いわゆる「古典」だけに限って考えてみることにする。

第1は、3年生の段階で、古典・伝統というものを単なる文化財として考えるだけでなく、現代のわれわれに遺された遺産、現代に継承して行くべきものであるという認識に立っての単元設定となっている点は評価できるし、そういう観点は高校古典にも継承されて行くべきだと思うが、しかし、この教科書だけに限って言えば、そういう認識だけが先行しており、具体的古典作品が採られておらず、いきおい観念的な単元になってしまっているのは残念である。

第2は、川柳、ことわざ、格言、竹取物語というような親しみやすい教材、内容が割合よく知られている文章を最初に置き、興味を持たせるよう動機付けに工夫が見られる点はよい。

第3は、竹取物語・今昔物語(中古)、平家物語・狂言(中世)、川柳(近世)と、教材選択にも各時代にわたって作品を採ることを配慮した点はよいと思うが、中古、中世はとにかく、近世文学を川柳で代表させた点についてはやや問題がある。先にも述べた、中学校が義務教育の最終段階であり、これ以後古典に接する機会を持たぬ生徒達もいるかもしれないということを考えると尚更である。

第4には、語法的な問題である。1年生でかなづかい、2年生で古語と係り結びを参考としてとりあげ解説しているが、係り結びを何故ここで教えるのか。つまりもっと基礎的な大切なことが係り結びよりも前にあるのではないかということ、用言や助動詞の活用・活用形などをやった後でなければ、係り結びというものが理解できないのではないか、ということである。

2. 高校導入期の現状

次に、高校古典の導入期の現状はどうなっているだろうか。中学校の場合と同じように、先ず手許にある数種類の教科書の最初の部分を列挙してみる。

B社 単元名 古典への接近

教材 天にとよむ (おもしろさうし・万葉集)

梓 弓 (伊勢物語)

竹 芝 寺 (更級日記)

丹波に出雲といふ所 (徒然草)

木曾の最期 (平家物語)

C社 単元名 随筆文学

徒 然 草 (合計23段を採録)

教材名 序 段 つれづれなるままに

世 俗 奇 談 1.仁和寺にある法師

2.これも仁和寺の法師

………

芸 の 道 1.亀山殿の御池に

………

D社 単元名 今昔物語集

教材 検非違使忠明, 清水にして敵に会ひ命を存せる語

つはものだてける者, わが影を見て

恐れをなせる語

鈴香の山にして, 蜂, 盗人を刺殺せる語

E社 単元名 古文入門

教材 古典に親しむ (つれづれ草, 第13段とその解説)

古典を学ぶ

児のそら寝 (宇治拾遺物語)

衣のたて (古今著聞集)

ある人, 弓射ることを習ふに

(つれづれ草)

丹波に出雲といふ所あり

(つれづれ草)

文語の文法 (活用, 助動詞, 助詞, 文の構造, 敬語の概説)

F社 単元名 古文入門

教材 安養の尼の小袖 (十訓抄)

ちごのそら寝 (宇治拾遺物語)

良峰宗貞の出家 (今昔物語集)

かなりのヴァリエーションを見せているようではあるが、若干の共通点、問題点について考えてみよう。

第1は、全体に説話、あるいは説話ふうの教材をもってきていること。説話は、比較的分量が少なく、その中である程度のストーリーを持ち完結性を持っているため、いわば扱いやすいと言える。しかし、文学史全体の中で考えてみると、やはりそれは一部に過ぎず、長編散文、詩歌、韻文等の重味に比較するとそれらより大きいとは決して言えない。導入単元だけに全てを盛り込む必要はないし、技術的に不可能でもあるが、それにしても偏り過ぎではないだろうか。

第2は、興味付けの意図のためであろうが、いわゆる楽しいお話が目立つ。たとえば「徒然草」の丹波に出雲といふ所、これも仁和寺の法師、「今昔物語集」のつはものだてける者、わが影を見て恐れをなせる語、鈴香の山にして蜂盗人を刺殺せる語、「宇治拾遺物語」の児のそら寝等。楽しい話もそれはそれで良いのだが、これらの話は、作者の状況、思想、あるいはその話の生まれた時代状況、背景、そういったものをしっかりとおさえて行かないと、ただ単に「楽しいお話」になってしまう恐れがある。そういうものまで要求されると今度は反対に導入期の教材としては難しいものになってしまう。編修者に、中学校教科書A社の3年生用に見られた古典と現代との結合という命題がどの程度切実に意識されているのだろうか。

第3に、語法的な点についてであるが、何れの教科書も、体系的に考えて行こうとしているのか、それとも帰納的に考えて行こうとしているのか、その姿勢がはっきりしない。敢えて言えばかなり便宜的に扱っているように見えるのである。たとえば、F社の「歴史的かなづかい」の解説は次のようになっている。

古典の文章は、普通、古文といわれる。古文では歴史的かなづかいが用いられる。現代文は、ほぼ現代語音に基づいた現代かなづかいで書かれるが、古文は、一般に、平安時代中期の語音を基準にしたかなづかいで書かれており、これを歴史的かなづかいという。次の傍線部がその例である。

紙おすまといふもの ゐられたりけるに
思ひつらめ

これでは歴史的かなづかいが何であるのか、どういうものであるのか、そういうことはほとんど理解できないのではないかと思う。

3. 「古典入門」について

今まで述べてきたことをまとめながら、古典入門期の指導のあり方について私見を述べて行きたい。

1) 教材

入門期だけに限らないが、その時期においてはとりわけ興味を持ってそうな教材が用意されなければならない。しかしその興味とは、今までも述べて来たように、表面的な単なる面白さではない。くだらない笑話などをもってきて、アハハと笑って古典は楽しい、それではほんとうの意味の興味付けにはならないし、生徒をバカにしているとも言えよう。教科書にマンガ性を求めるてはいないだろうし、求めさせてはいけない。ここでいう興味とは、そういうものではなく、いわば知的興味とでも言うべきものである。たとえば、前掲C社の教科書を使用する生徒が、高校に入って始めて出会う古文は、「つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひ

て…………。」である。最初からこのようなやゝ難解なものに出会うと、とまどいはあるかもしれない。しかし、つれづれとはどういう状態であるのか。辞書をひくと「所在なく退屈なさま」と出ている。なるほど筆者は退屈なのか。退屈でしかたなく一日中机にむかっているんなことを書いているのだな。ところが、作者の説明を読むと兼好は出家した、とある。出家とは何か。そうすると、彼はつれづれという状態になっただけではなかったのだ。主体的にそういう状態を選び取ったのだ。何故。さしたる具体的理由がないということは。自由。そうか精神的な自由を獲得するためか。そうすると兼好は、つれづれという状態を嘆いたりしているのでは決してない。むしろそういう時こそ彼の精神が、自由に生き生きと活躍している時なのかもしれない。翻えて我々の生活は。忙しすぎる現代人。つれづれなどという状態は望み得べくもない。そういう中で精神の自由を獲得するには、…………扱ひ方によって、と述べたが、もちろんこれは、教材が本物であるからである。

したがって、興味性と同時に、教材そのものが古典としてのすぐれた価値を持っていなければならない。難易性ということも無視できないことではあるが、それがすべてではない。又、扱ひ方によってかなり克服できるものである。たとえば教科書採択の組み合わせ方によると、中学3年生、高校2年生、高校3年生と合計3回『奥の細道』を読むこともあり得る。そして3回ともあの著名な「月日は百代の過客にして…………。」という冒頭部分は必ず読むことになる。中学3年生でやったものを高校3年生でまたやるのはバカらしい。とか、高校3年生でやるものを中学生でやるのは難しすぎる。そういう考えもあろうし、同じものを3度もやるのはもったいないということも言えよう。しかし、やむことなく芭蕉を旅に駆りたてたものは何だったのか。晩年、それも病気がちの芭蕉をあゝの辺境の地みちのくへ旅立たせたものは。この旅の収穫の1つである不易流行という考え方と旅とのかかわりは。この作品に見られる著しい虚構性の意味は。…………と掘り下げて行くとこれもやはりそれぞれの発達段階に応じた享けとり方のできる本物の古典教材と言えよう。

以上挙げたもののほかに、『万葉集』の歌なども導入教材として考えられるのではないかと思っている。屈折の少ない素朴な感情が、生徒達の共感を呼ぶに違いないと思う。

2) 扱ひ方

私は古典との接し方を大きく三段階に分けて考えたと思っている。

まず第一段階は、原文でなく、現代語訳で与える。だいたい中学1年生くらいで、生まれて初めて古文に

接した場合、それは半ば外国語のようなものであろうと思う。そういう違和感を少なくするために用意された程度の低い、内容の貧しい安っぽい古文をたどり読みするよりも、むしろ思いきって外国文学と同じように考え、翻訳（現代語訳）で与えた方がよいと思う。ただし、正確な逐語訳で文学的香りの無いものではなく、美しい現代日本語でなければならぬだろう。堀辰雄の『かげろふの日記』とか谷崎潤一郎の『源氏物語』とか、探せばあるように思う。そういう本物の古典を、本物の現代語訳で読むことで本当の意味の動機付けができるように思う。こういうすぐれた古典を、原文で読めるようになりたいものだ、そう思ってくればより成功と言えよう。

第二段階は、注釈無しで原文を読ませること。注釈無しということは次の3つの意味があると考えている。その1は、ありのままの姿に触れさせること。その2は、注釈を絶対視したり、それにひきずられたりする癖をつけないため。これを私は活字崇拜主義と呼んでいるが、辞書信仰も含めて相当に根強いものである。そうならないために、ありのままの古典の姿を見て、自分なりのイメージの翼を羽ばたかせてみる、そういうことも意味のあることではないかと思っているのである。小さい子供に最初は、字のない絵だけの絵本を与えるのと同じである。

第三段階は、普通の古典の与え方、読み方である。注釈を見、辞書をひき、参考書を調べ、自分で考え、そういう読ませ方である。

入門段階では、特に第一、第二段階をしっかりと意図的にやりたいと思っているのである。

3) 語法的なものの扱い方

文法体系というものは、最初から存在したものではなく、後になっていわば便宜的に、考え出されたものである。そういう意味でアプリアリな絶対のものではなく、便利で有効なひとつの仮説である。そういう単

純な事実を私は重視したいと思う。従って結果を覚えることよりも、体系形成の過程を追体験するような形で教えていきたい、それが基本的な考えである。すべての面にわたってそういう教え方をすることは、教える方の力量、時間的余裕の無さ等で不可能であるが、そういうやり方でやる方が、結局は結果を覚えるための早道でもあるように思う。

歴史的かなづかいにしてもそうである。語頭以外のハ行音はワ行音で発音する。そういうことをただ覚えさせるのではなく、当時はやはりキチンとハ行音で発音していただろうこと、それが次第にワ行音に変化してきたこと（書きことばは、話しことばの変化に比べてかなり遅れることや、P音列のことを話してもよい。）したがって現在でも「われわれは…」とか「学校へ…」という形が遺っており、やがてこれらも消えて行くのではないか。つまり、歴史的かなづかいと現代かなづかいという二つのものが対立的に存在するものではなく、そのそれぞれが、ことばの移り変りの中の一駒の現象であり、現代かなづかいも固定的な完成された形ではないこと。そういうふうな教え、考えさせて行きたいと思うのである。そういう思考を中学時代に積み重ねておけば、高校へ入ってからより複雑な事柄に対した場合にもすんなりと入って行けるのではないかと思う。

おわりに

表題として掲げた、中・高のつながりを視点にしてその全体の見取図を描くということにまでは至らなかった。紙数の制限ということもあり、準備不足ということもある。しかし、基本的な考え方については概略述べ得たように思う。今後こういう視点から、中高一貫の具体的指導計画を構想し、実践による裏打ちをし、後日その成果を発表したいと思っている。